J-STAGE NEWS
J-STAGEニュース
No. 45
電子ジャーナルの最新情報をおとどけするJ-STAGE機関紙
Online ISSN：2434-4311
2021年1月29日発行
国立研究開発法人
科学技術振興機構

目次：

プレプリントサーバを取り巻く現況について 1
コロナ禍での学協会活動の変容 2
【シリーズ学会訪問】～日本分析化学会～ 4
【J-STAGE機能紹介】～Altmetric badge～ 5
2020年度　第2回J-STAGEセミナー（JST-STMジョイントセミナー）開催報告 6
J-STAGE：2020年の各種統計 7
編集後記 7

プレプリントサーバを取り巻く現況について

https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.45.1

近年、オープンサイエンス推進の潮流等によって、世界ではプレプリントサーバの新規立ち上げが増加しています。

プレプリントサーバとは、査読が終わっていない段階の論文（プレプリント）をWeb上で投稿・公開できるプラットフォームです。プレプリントサーバへ論文原稿がアップロードされると、簡易チェック後、査読を経ずに1、2日でオンライン上に掲載され、誰でも無料で閲覧できるようになります[1)]。またプレプリントサーバは、

・早期に研究コミュニティで議論されることで論文の質が向上し、また、査読負担の軽減につながる

・投稿時から無料で閲覧可能であることからオープンアクセスに貢献する

・論文の改訂履歴が明らかになることにより透明性が向上する

などのメリットも挙げられる一方、品質の担保されていない論文が公開されるなどの問題点も含んでいます。

2020年1月31日、ウェルカム・トラスト（Wellcome Trust）のサイトでは、「新型コロナウイルス関連の研究成果およびデータの迅速な共有に関する声明」[注1)]が発表されました。ウェルカム・トラストは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の大流行に対し、WHO（World Health Organization、世界保健機関）による世界的な対応を支援すべく、新たな知見への迅速なアクセスに努めるとし、世界中の研究者、機関へ呼びかけを行いました。2021年1月現在、世界の150以上の研究機関、助成機関、学術誌が署名しているこの声明の中にも、プレプリントサーバの活用を推奨するとの文言が記載されています。このことから、世界の学術コミュニティにおいて、プレプリントの存在が積極的に受け入れられつつあることが示唆されます。

一方、COVID-19に関連したプレプリントの数を国・地域別で見てみると、図1からもわかるように、中国や米国の数が多く、日本は8位（Hong Kongと同率）と海外から出遅れた状況にあります 。

日本国内でプレプリントの認知があまり進んでいないことについては、J-STAGEの利用機関および一般閲覧者を対象に行った令和元年度の利用者満足度調査[2)3)]の結果からも見て取れます。

J-STAGE登載誌発行機関への「プレプリントサーバで公開された原稿の投稿を認めているか」 という質問に対する回答は、「未検討、あるいは検討中である」が62.3%、「認めていない」が26.4%と多勢を占め、「認めている」は、わずか2.4%という結果でした。また、閲覧者への設問 「プレプリントを閲覧しているか。その理由」に対する回答は、「閲覧していない。プレプリントを知らなかった」が最も多く、63.4%を占めています。また、「プレプリントサーバへ論文を投稿したことがあるか。その理由」に対する回答は、「ない。プレプリントサーバを知らなかった」が37.5%という結果となっています。

プレプリントを通じた研究進展がもたらす今後の科学技術政策上の示唆については、科学技術・学術審議会 情報委員会 ジャーナル問題検討部会（第7回）[注2)]でも議論されており、今後、日本の研究成果流通におけるプレプリントおよびプレプリントサーバの利活用の機運が高まってくると考えられます。この状況を踏まえ、JSTでもプレプリントサーバの設置を検討してまいります。

（情報基盤事業部 研究成果情報グループ）

【引用文献】

1）Kakoli Majumder. “プレプリントが研究の普及に果たす役割”. Editage Insights. 2017-03-08. https://www.editage.jp/insights/the-role-of-preprints-in-research-dissemination,（accessed 2020-11-12）.

2）“令和元年度J-STAGE利用者満足度調査（発行機関向け）”. 国立研究開発法人科学技術振興機構. p. 22. https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_survey2019_society.pdf,（accessed 2020-11-12）.

3）“令和元年度J-STAGE利用者満足度調査（日本語閲覧者向け）”. 国立研究開発法人科学技術振興機構. p. 19. https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_survey2019_general_ja.pdf,（accessed 2020-11-12）.

【注釈】

注1）https://wellcome.org/coronavirus-covid-19/open-data

注 2）https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu29/001/siryo/mext_00008.html

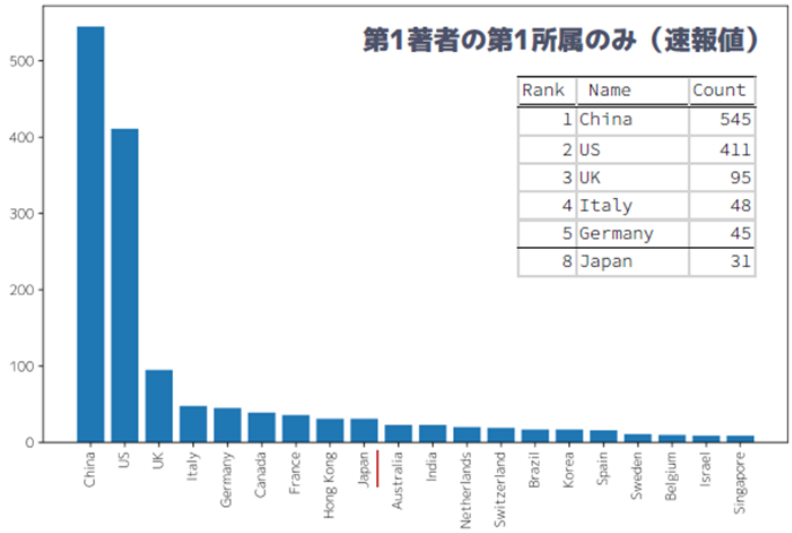


図1 bioRxiv，medRxiv に含まれるCOVID-19 / SARS-CoV-2 に関する国・地域別論文数
出典：COVID-19 / SARS-CoV-2に関する研究の概況― 2020年4月時点の論文出版等の国際的なデータからの考察. 文部科学省 科学技術・学術政策研究所. 小柴等，伊神正貫，伊藤裕子，林和弘，重茂浩美. https://doi.org/10.15108/dp181

コロナ禍での学協会活動の変容

https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.45.2

今後J-STAGEニュースでは、国内外の電子ジャーナル出版をはじめとする学術業界動向をご紹介していきたいと思います。
今回は、J-STAGEセンターに携わる株式会社アトラスの井津井豪様に、コロナ禍での学協会の様子をご執筆いただきました。

∞…∞…∞…∞…∞…∞…∞

新型コロナウイルスによって私達の生活、経済活動、社会は大きく変わり、今も現在進行形で新しい生活様式を模索している状態です。

このような状況下で学術活動も大きな影響を受けました。学術活動に携わる研究者や技術者の声として、2020年7月には文部科学省 科学技術・学術政策研究所から「新型コロナウイルス感染症等による日本の科学技術への影響と科学者・技術者の貢献に関するアンケート調査について（速報）」注1)が公開され、また、9月には文部科学省 科学技術・学術審議会学術分科会・情報委員会から「コロナ新時代に向けた今後の学術研究及び情報科学技術の振興方策について（提言）」注2)が公開され、学術活動への影響と変容を踏まえた今後の方策について書かれています。

上記のアンケートや提言でもまとめられていますが、ここでは、日本の学協会の現場から聞かれた日々の身近な活動への影響とその変容をご紹介します。

●学術大会

学協会活動の中で突発的に大きな影響を受けたのは学術大会です。

3月、4月に国内では少なくとも100大会の開催が予定されていたようですが、新型コロナウイルスに関する報道が出始めて以降、多くの大会が現地開催を取りやめました。その他にも大会を延期や中止としたり、予稿集の冊子発行や大会Webサイトでの予稿公開で発表成立とみなしたり、あるいはオンラインで開催するなど、開催方式の変更を余儀なくされました。方式変更にあたってはこれに伴う参加費をどのように扱うか、多くの大会のご担当者が苦慮されたようです。

開催時期を夏秋以降に延期した大会も、5月頃からは会場は使わずオンラインでの開催方式に変更することが主流となり、2020年11月現在ではオンラインでの配信を一切実施しない大会はほぼなく、この方式が定着してきたと言えそうです。

オンライン開催と一口に言っても様々な手法があり、代表的なものとしては

・発表スライドやポスターデータのWeb公開
・Web会議サービスを利用したライブ発表
・動画配信サービスを利用したオンデマンド配信

があります。一つの大会の中でもプログラムによってこれらを組み合わせて使い分ける場合も多く、今後一層変化していくと思われます。

オンライン開催で大会運営側にとって一番大変なのは、Web会議サービスや動画配信サービスを使いながら滞りなく進行することです。事前の準備はもちろんですが、特にライブ発表では不測の事態に備え、セッションの座長とは別にシステム面での進行サポート担当を配備する対処が取られています。

他には特に医学系分野で、認定資格についての課題がありました。これまでは大会への参加が資格取得や更新のためのポイントとして加算されていましたが、オンライン開催において、参加者が対象の発表や講義を確実に聴講したか、つまり動画を最後まで見たか、という聴講証明をどう実現するかに頭を悩ませている事例が多数ありました。

一方、これまでは会期当日も現地で参加申込を受け付け現金で参加費を徴収していましたが、その必要がなくなりすべてクレジットカード決済やコンビニ決済などのオンライン決済で簡便化できた事例も多く見受けられます。

発表・参加する側の研究者にとって大会のオンライン化は、移動や宿泊の時間と経費がかからず、どこに住んでいても参加できることが何より大きなメリットとなっています。また、仕事や家庭の事情があってもスポットで参加できることも魅力の一つです。実際に、スマートフォンでアクセスして参加する比率も多く、オンライン開催により、例年に比べて大会の参加者数が増えたという声もよく聞かれます。

その他にも「発表資料が手元で見やすい」「質疑応答が活発にできた」「オンデマンド配信で、たくさんの発表を聞ける」などの、これまでの現地開催と比較して新たなメリットを実感できているという研究者も多く、全体的には好意的に受け取られているものと思います。

反面、通信環境による配信品質の問題や、学術大会本来の臨場感や雰囲気が感じられないこと、大会出展の企業からの情報が収集できない、などのデメリットもあります。そして一番よく聞かれるのは、知人との偶然の遭遇、他の研究者との情報交換・交流がない、という点です。例年と比べて参加者数が減少した大会では、このデメリットが大きく影響したと分析する学協会もありました。

こうした声を受けて、Web上で親睦会を企画・開催したり、現地とオンラインのハイブリッド開催を試みる大会も徐々に出始めており、今後の学術大会のニューノーマルが今まさに作られている状況です。

ここまで、大会当日の開催方式についてご紹介しましたが、こういった開催方式の検討そのものや発表プログラムの編成など、大会事務局や大会実行委員会の運営・準備自体がオンラインで進められていることも大きな変容点となっています。

●学会事務局運営

多くの学協会では学術大会の開催とあわせて会期中に総会が開催されますが、大会の中止により総会も中止となり、決議事項が保留になってしまった事例もあります。また、大会を延期したことで、これまで開催のタイミングで見込めていた新規会員の入会がほとんどない、という声も聞かれました。

また、4月、5月に一時的に学会事務局を閉鎖した学協会もあり、事務局担当の方が自宅待機、あるいはテレワークへ移行するケースも見られました。ところが、自宅では会員への請求書や領収証の発行および郵送のような作業ができないため、業務全般を一旦休止したり、担当の方が交代で出勤して対応したり、これまで通りの事務局業務ができなかった学協会が多かったようです。

また、学協会によっては大学の研究室内に事務局を設置し、研究室のPCで事務局業務を行っている場合があります。大学への入構制限で教職員以外が立ち入れなくなったことで、事務局業務が滞ったり、担当の先生がわざわざ大学へ出向いて作業を行わなければならなかったという事例も聞かれました 。

社会全体で働き方改革が求められていますが、それは学協会事務局運営においても同様で、場所を選ばないオンラインでの業務運営の必要性の高まりと、そして実際に少しずつ事務局業務がオンライン化されつつあることを感じます。

●ジャーナル発行

ジャーナル制作・発行にあたっては、編集委員会が開けない、冊子が作れない、冊子を発送できない、という問題が生じています。

このような状況下でジャーナル発行を維持するにあたり、多くの学協会が、編集委員や編集事務局が集まらなくとも編集業務が進められるように編集査読工程のオンライン化を検討しています。

また、ジャーナルの電子化の動きも加速されています。現在冊子のみで発行しているジャーナルをオンライン化する検討が進んでいるとともに、すでにオンライン化されているジャーナル以外に、学協会で発行している会員向けの機関誌もオンライン化する傾向が出てきています。

実際、今年度のJ-STAGEへの登載希望は例年と比較して増えており、「廃刊誌のような過去の資料もオンライン化してJ-STAGEで公開したい」「もっと読んでもらえるようにオープンアクセス誌へ転向したい」などの要望も寄せられているようです。

ジャーナルの読者視点では、研究機関の図書館が休館していた時期には、「ジャーナルを読みたいが図書館で冊子が読めない」「オンラインだとしても自宅からは閲覧できない」という問題が挙げられています。

世界的には文献データベースやオンラインジャーナルサイトでコロナ関連の文献を無料で公開する動きが見られますが、同様にJ-STAGEでもコロナ関連分野にかかわらず、これまで購読者・購読機関認証をかけていたジャーナルの一部を無料公開する取り組みを行っています[注3)]。

2020年5月にはJ-STAGEのアクセス数が月間１億アクセスを超えたことがJ-STAGEニュースで紹介されました[注4)]。これはJ-STAGEの21年の歴史の中で初めてのことで、コロナ禍での研究において電子ジャーナルの果たす役割が非常に大きくなっていることがうかがえます。

なお、論文に関して世界全体に目を向けると、コロナ以前にも注目されていたプレプリントサーバでの公開が、コロナ禍において活気づいています。スピードと質のバランスの問題がありますが、2019年3月に公開された「我が国のジャーナルの振興に向けたJ-STAGE中長期戦略」[注5)]でもプレプリントサーバへの取り組みが挙げられており、今後さらに重要視されるでしょう。

ご紹介したように、コロナ禍において多くの学協会が活動の変化を迫られました。これまでの常識とは違う劇的な変革で、携わった方は非常に苦労されたと思いますが、結果として、オンライン化による学会業務の効率化や、研究者自身のメリットが得られた変容だったと言えます。

コロナ禍初期は「一日も早く元のように」という思いでしたが、これを機に業務のオンライン化の推進など、良い方向への改革が少なからず進んだこともあり、完全に元に戻るのではなく、今を前提としたさらに新しい方向に向けて進める機会と捉えたいと感じます。

コロナウイルス感染症の流行が早く終息することを願うとともに、日本の研究活動を支える存在である学協会が今回の変容を元にして活発に活動し、さらに学術研究が発展することを願います。

【注釈】

注1） https://doi.org/10.15108/stfc.0001

注2） https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/mext_00538.html

注 3） https://www.jstage.jst.go.jp/static/pages/temporarily_free_titles_202006/-char/ja

注4） https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.43.6

注 5） https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/pub_JstageStrategy2019.pdf

【シリーズ学会訪問】～日本分析化学会 ～

https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.45.3

本号の「学会訪問」では、「Analytical Sciences」誌を発行している、日本分析化学会の長谷川健編集委員長と植草秀裕先生に、ジャーナルの質の向上に向けた取り組みや、J-STAGEにまつわるお話を伺いました。

●貴学会についてご紹介ください。

公益社団法人日本分析化学会は、分析に関する学術情報の交換ならび分析化学の進歩発展を図り、それを通じて科学・技術、文化の発展、人類の福祉に寄与することを目的に1952年に設立され2021年で創立69年を迎えます。分析化学は、理・工・農・医・歯・薬学などに関連した横断的学際領域をカバーしており、現在約6,000名の会員が在籍し、分析化学に関する学術研究団体では世界最大の規模を有しています 。

主に、ジャーナルの発行、講演会や講習会の開催、JISの制定・改正、各種技能試験の実施、標準物質の開発と頒布等の事業を行っています。

ジャーナルは、会員誌「ぶんせき」、和文論文誌「分析化学」、英文論文誌「Analytical Sciences」、同「X-ray Structure Analysis Online」（webのみの無料公開）の4誌を発行しており、そのうち論文誌3誌をJ-STAGEで公開しております。

●「Analytical Sciences」誌の沿革、特徴、アピール点をお聞かせください。

Analytical Sciencesは1985年に創刊されたオープンアクセスジャーナルで、年間2～300報の分析化学に関する科学技術論文を世界に発信しています。投稿料・掲載料ともに無料のため、アジア諸国からの投稿が非常に多くなっておりますが、学会独自の投稿・審査システムを利用しているため迅速な審査が可能で、速報については投稿から平均12日でアクセプトとしています。また、J-STAGEの早期公開システムの導入により、アクセプトから最短1週間でDOIの付与が可能となりました。

Analytical Sciencesのジャーナルインパクトファクター（JIF）は、科研費補助金による各種プロモーションのおかげで年々上昇しており、最新のJIF（2019）は2.049となっています。

●JIFを上げるためにどのようなことを行っていますか。

国内外の著名な分析化学研究者に総説の執筆を依頼し、インパクトのある論文を掲載するようにしています。また、Editorial Boardの体制を強化するため、海外の研究者に協力を依頼し、現在22名の海外の研究者が編集委員として投稿論文の編集作業に参画しています。

その他にも、注目論文を掲載した小冊子を作成し、各種会議や他学会の同封広告で配布したり、サイテーションの多い著者や優秀論文の著者を"Best Paper Award"として表彰するなど、秀逸論文投稿のインセンティブの向上を図っています。

●貴学会の国際発信へ向けた活動、およびオープンアクセスに対する取り組みについてお聞かせください。

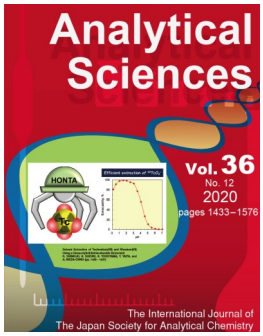
まずは、国際的に著名な分析化学研究者へ、本誌コンテンツの配信（Author Connect）およびCitation Notice Serviceを利用して本誌のプレゼンスをアピールする取り組みを行っています。また、情報発信力強化のためSNSを活用して新刊とHot Articlesを紹介していますが、インド、米国、タイ、トルコからのアクセス数が多いです。

さらに、国際的展示会・国際会議の場では、パンフレット等の配布による広報活動や、出展したブースにおいて、アンケートの実施、参加者の動向調査、本誌の紹介、投稿勧誘等を行っています。

●J-STAGEの良い点、改善すべき点等をお聞かせください。

J-STAGEは初期の頃から利用しており、海外に向けた発信が可能になること、雑誌全体がデジタル保存されることに期待しておりました。Journal@rchive事業（2006～2012年）

長谷川編集委員長



Analytical Sciences

は、歴史ある「分析化学」と「Analytical Sciences」のデータを、過去に遡って全て収録できた点は大変良かったのですが、記事形式が合わないことがあり交渉したこともありました。

現在J-STAGEは非常に安定して稼働しており、海外発信、インターネット検索対応、DOI付与など学会では対応できない機能を持っている上に無償で利用できるのが良い点だと思います。

学会では雑誌のホームページを作成しており、そこからJ-STAGEの記事ページへリンクするなど、凝ったホームページ作りを行っていますが、それを支えているのはJ-STAGEの安定性だと思います。

一方、共通プラットフォームのため、機能やデザインの柔軟性がないのが残念な点と言えます。雑誌のホームページの見栄えや使いやすさは雑誌の評価としても重要なので、改善していただければと思います。

また、本学会では大会の要旨集の公開も検討中なので、J-STAGEを使って簡単に公開できるように、最新のWeb技術を使ってページを構成できるような機能が搭載されることを期待しています。

●J-STAGE Dataやプレプリントサーバ※についてはどのようにお考えでしょうか。

J-STAGE Dataの利用で、サイズの大きなデータが公開でき、さらにDOIが付与されて独自にアクセスできるようになることは重要であり、近年、生データの公開が検討されている分野があると理解はしていますが、用途の検討はこれからと考えています。

また、プレプリントサーバについては、化学分野でも利用が始まった段階であると認識しています。本学会でもプレプリントサーバへの対応を議論する必要がありますが、J-STAGE側からのガイダンスがあると議論の土台になると考えています。

※編集部注：現在JSTでは、プレプリントサーバの構築を検討中です。

●最近の学協会を巡る状勢（国内の学協会のジャーナルが海外大手商業出版社へ移っていく状況など）については、どのようにお考えでしょうか。

一つの学会が少数の論文誌しか持っていなかったり、海外出版社のようにパッケージ販売ができないため、相互引用によるJIFの上昇が難しい状況にあります。こうしたことから、海外に委託する学会が出ているものと思われます。

●貴ジャーナルの今後の方針（抱負）をお聞かせください。

JIFは最低でも2.5くらいはないとvisibilityが向上しないと思います。また、いつまでも無料のスタンスを貫くことは得策ではなく、ジャーナル単体で独立して運営ができるような努力と改革が必要であると考えています。

ありがとうございました。J-STAGEも利用機関の期待に応えられるよう努めてまいりたいと思います。

【J-STAGE機能紹介】～Altmetric badge～

https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.45.4

J-STAGEでは、ユーザーからの要望や電子ジャーナル出版業界の最新動向を踏まえ、システムの改善や機能拡張に取り組んでいます。今回は、Altmetric badgeについてご紹介します。

●オルトメトリクスとは

これまで、学術研究を評価するためにジャーナルインパクトファクターやh-index等の様々な指標が開発されてきました。2010年代になると、それらは学術コミュニティ内での影響を表すにとどまっており、従来とは別の観点から学術研究に対する評価を行う指標（＝“Alternative metrics”）が必要だとする「オルトメトリクス」という概念が提唱されるようになりました。現在、このオルトメトリクスの考え方は、ソーシャルメディアでの言及やマスメディアでの報道など、社会的な影響を加味した学術論文の評価指標として定着してきています。

●J-STAGEにおけるオルトメトリクス対応

オルトメトリクスを計測するサービスは複数存在しますが、J-STAGEではAltmetric社の提供するAltmetric badgeの表示に対応しています。Altmetric badgeは、当該記事に言及したメディアの種類を色で表すドーナツ型の部分と、当該記事の影響の大きさを独自の算出方法により数値で表すAttention Scoreの部分から構成されています。

J-STAGEで公開されている記事のAltmetric badgeを見るには、以下の方法があります。

・書誌画面から確認する

J-STAGEでは、2018年から、資料全体でのAttention Score累計値の高い一部の資料について、書誌画面にAltmetric badgeを表示しています（図1）。badgeをクリックするとAltmetric社のwebサイト（図2）が表示され、詳細な統計情報を確認できます。

・ブックマークレット“Altmetric it!”を利用する

上記表示の対象外となっている記事でも、ブックマークレット（ブラウザ拡張機能の一種）を利用して簡易的にAltmetric badgeを表示させることができます。Altmetric社のwebサイトからブックマークレット“Altmetric it!”を入手し、書誌画面を開いた状態でブックマークレットを実行することで、当該記事のAltmetric badgeを表示させることができます。（図3）

ブックマークレットの入手ページ
https://www.altmetric.com/products/free-tools/bookmarklet/

●お問い合わせ

本件に関する質問等は下記までお問い合わせください。
JST（科学技術振興機構）情報基盤事業部
J-STAGE センター
メールアドレス：center@jstage.jst.go.jp

図1：J-STAGE書誌画面上でのAltmetric badge表示例

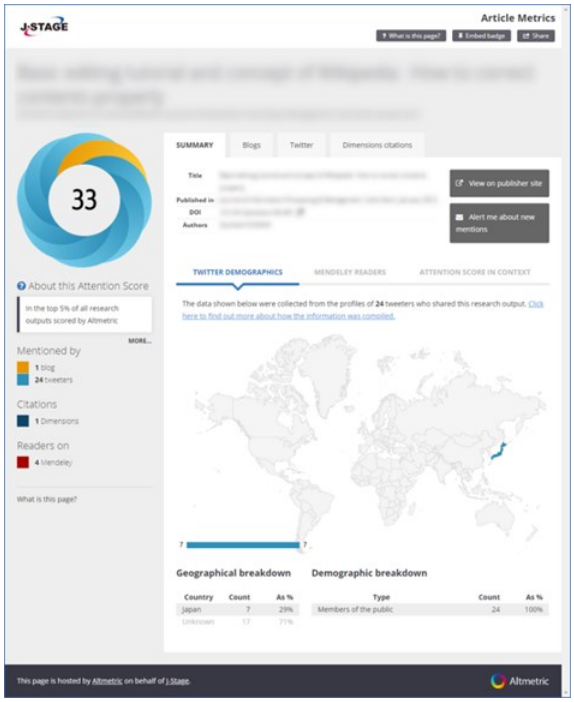


図2：Altmetric社のwebサイトでの詳細情報表示例

図3：ブックマークレットによるAltmetric badgeの表示

2020年度 第2回J-STAGEセミナー（JST-STMジョイントセミナー）開催報告

https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.45.5

2020年10月27日(火)、今年度第2回のJ-STAGEセミナー（JST-STMジョイントセミナー）を開催しました。

今年度のJ-STAGEセミナーでは、「ジャーナルから見た研究データ」を年間テーマとしています。また、STM国際出版社協会（STM）も2020年を「STM研究データ年」と宣言しており、第2回はJSTとSTMとのジョイントセミナーとして、「学術出版における変革：研究データ」と題し開催しました 。

JSTが主催する前半のセッションでは、研究データおよび論文根拠データの共有、リンク、引用の促進に関する国際的な取り組みやジャーナルのデータ公開に関する事例等を、STMが主催する後半のセッションでは、FAIR原則が様々なステークホルダーに認知されるための研究データのあり方に焦点を当て、学術研究におけるデータの共有、リンク、引用の増加、研究データの共有における技術的なトレンド、COVID-19パンデミック下における研究データ共有の課題と利点に関する研究者の見解などを以下のプログラムで紹介しました。

《プログラム》

第1部：J-STAGEセミナー

●「Open science and the PID Graph」

ーMatthew Buys氏（DataCite）

●「A chemistry perspective on research data」

ーRichard Kidd氏（Royal Society of Chemistry）

第2部：STMセミナー

●「Trends in the International STM Publishing Industry and the importance of Research Data」

ーIan Moss氏（STM国際出版社協会）

●「STM Tech Trends 2024: Focus on the User - Connect the Dots」

ーEefke Smit氏（STM国際出版社協会）

●「Creating the Engine for Scientific Discovery: Nobel Turing Challenge as a grand challenge project in AI and broader science and technology fields」

ー北野 宏明氏（特定非営利活動法人システム・バイオロジー研究機構、沖縄科学技術大学院大学）

今回のJST-STMジョイントセミナーは、コロナ禍の影響により前回に引き続きWeb開催となりました。154名もの参加をいただき、講演終了後のアンケートでは、「興味あるトピックで良かったです。」「もう少し資料に記載されている以上の説明があると良かったなと感じました。」などの回答をいただきました。なお、講演の内容はJ-STAGE Youtubeチャンネル *1) で公開しておりますので、ぜひご覧ください。また、講演のスライドはJ-STAGEのサイト*2)から閲覧できます。

*1) https://www.youtube.com/playlist?list=PLSXgr8_ZxZT3u4JamD13SlxkW7AoqE5tC

*2) https://www.jstage.jst.go.jp/static/pages/News/TAB4/Pastlssues/-char/ja#2011/12

第3回J-STAGEセミナーは、3月1日(月)に開催いたします。「データ公開の実践」と題し、研究データを登載・公開する側の視点に立った実践事例を中心に紹介する予定です。皆さまのご参加をお待ちしております。

J-STAGE：2020年の各種統計

https://doi.org/10.34344/jstagenews.2020.45.6

2020年の1年間で、J-STAGE登載誌の中で最もアクセス（「PDFのダウンロード」+「全文HTMLへのアクセス」）された記事などをご紹介します。

（2020年12月31日時点）

	英文記事	和文記事
2020年、最もアクセスされた記事	「**BioScience Trends**」14巻1号 "Breakthrough: Chloroquine phosphate has shown apparent efficacy in treatment of COVID-19 associated pneumonia in clinical studies" DOI：10.5582/bst.2020.01047 総アクセス数：474,714回	「**化学と教育**」59巻9号 "気液平衡の基礎と液体空気の分留への応用(基礎化学品製造の実際と高校での教育実践)" DOI：10.20665/kakyoshi.59.9_464 総アクセス数：2,982,420回
2020年、最も引用された記事	「**BioScience Trends**」14巻1号 "Breakthrough: Chloroquine phosphate has shown apparent efficacy in treatment of COVID-19 associated pneumonia in clinical studies" DOI：10.5582/bst.2020.01047 被引用数：873回	「**栄養学雑誌**」44巻6号 "褐変物質に関する研究ーグルコサミン褐変物質の抗酸化性についてー" DOI：10.5264/eiyogakuzashi.44.307 被引用数：352回

早期公開でのアクセス・引用数を含む

	英文誌	和文誌（英和混在誌含む）
2020年、最もアクセスされた刊行物	「**Chemical and Pharmaceutical Bulletin**」 総アクセス数：3,050,122回	「**日本内科学会雑誌**」 総アクセス数：8,594,671回
2020年、最も多くの記事を公開した刊行物（早期公開は除く）	「**Internal Medicine**」 総公開記事数：642記事	「**ファルマシア**」 総公開記事数：525記事

「会議集・要旨集」は除く

編集後記

●本号では新たな企画として、J-STAGEにおける2020年１年間の各種１位についてご紹介しました。今後、J-STAGE独自の統計データを駆使していろいろな形でご案内していければと思います。2020年はコロナ感染の影響で参加希望機関の増加や利用機関の投稿数の増大など、J-STAGEもいつもと違う年となりました。2021年、雨にも負けず風にも負けずコロナにも負けずに頑張ってまいる所存です。本年もよろしくお願いいたします。（Y.M）

●2021年が始まりました。昨年はコロナ一色で、学術界でも大きな影響がありました。これについては、本号の「コロナ禍での学協会活動の変容」の記事からも伺えます。早くコロナが終息することを祈るばかりです。今年もJ-STAGEをよろしくお願いいたします！（K.O）

●2020年は時間感覚がよくわからなくなったまま、いつの間にか過ぎ去りました。さて、2021年。皆様にとっても実り多き1年になりますように✧（Y.K）

２つのTwitterを、ぜひフォローをしてください！
◆JST公式Twitter(@JST_info)　https://twitter.com/JST_info
プレスリリース・募集案内・イベント情報などをお届けします。
◆J-STAGE公式Twitter（@jstage_ej）　https://twitter.com/jstage_ej

J-STAGEニュース No.45　2021年1月 29日発行
編集発行：国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）
情報基盤事業部 研究成果情報グループ
〒102-8666
東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ
電話　：03-5214-8837（ダイヤルイン）
E-MAIL ：contact@jstage.jst.go.jp

© 2021 Japan Science and Technology Agency